

「みちしるべ」の実現に向けた実践—須賀川南部地区エリアプラットフォーム

村上 早紀子 福島大学

全国各地でエリアプラットフォームの設立および実践が展開されて久しい。本稿では、東北の現場から、須賀川南部地区エリアプラットフォームの実践を紹介したい。

本誌を愛読されている皆さんならご存知かと思うが、念のため記しておく、エリアプラットフォームとは、多様な人材の集積や様々な民間投資を惹きつけ、都市の魅力・国際競争力の向上を図るため、官民の多様な人材が参画する体制であり、国土交通省の「官民連携まちなか再生推進事業」で掲げられた制度である。本事業により2020年、須賀川南部地区エリアプラットフォーム（以下：エリプラ）が構築された。

エリプラには、福島県内で指定第一号となった都市再生推進法人である株式会社テダソチマをはじめ、企業や金融機関、行政など様々な人材が参画しており（図1）、恐縮ながら筆者も大学の人間としてご一緒させていただいている。

エリプラでは、まちなかの再生に向け、官民連携で持続可能なまちづくりを推進していくための行動指針かつ須賀川のまちなかの将来像を表した未来ビジョン「みちしるべ」を、2021年度に策定した。計画期間は10年間（2022年-2031年）であり、適宜中間検証や見直しを図りながら更新していくこととなっている。計画対象区域は、須賀川南部地区および中部地区である。

みちしるべでは、須賀川南部地区が須賀川の歴史・文化や魅力を次世代に確実につなぎ、誰もがいきいきと輝ける持続可能な未来へとつむぐ役割を担うために、「つなぐ・つむぐ」を基本理念に、「人と社会」「人と場」「人と環境」の3つの切り口から「10のみちしるべ」を掲げており、各みちしるべに関連したまちづくりに取り組むこととなっている。これまでは、みちしるべ2「中高生が自分の将来をイメージできるまち」に関連したデジタル人材育成プロジェクト「須賀川ワガママLab」の実施や、まちづくりDX交流拠点「須賀川ラボ」の整備、みちしるべ7「まちに開かれた場づくり」に関連した須賀川南部地区における所有者不明土地対策の勉強会といった取り組みが展開されてきた。

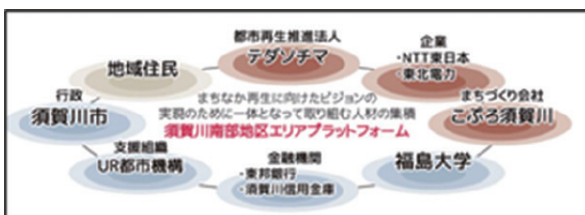


図1 須賀川南部地区エリアプラットフォーム
出典：須賀川南部地区エリアプラットフォーム「みちしるべ」



写真1 中島ビル一階の様子

そのうち特筆したいものが、みちしるべ5「働きたいまち」に関連し、旧中島ビルの改修により誕生した「マチソダテベース」である。旧中島ビルは、須賀川のまちなかに1976年に建設された鉄骨造り3階建のビルであり、かつては店舗も入居していたが次第に空きビルと化していった。そこで1階を改修し、チャレンジショップとして、2023年2月4日にオープンした。面積約370㎡に8区画が設けられている。出店期間は一週間から検討でき、使用料は月額1万円（水道代や光熱費込み）とされている。

さらにマチソダテベースは、須賀川市で定期的に開催されている「Rojima」の会場として活用されることもあり、その際に筆者も訪問したところ、眠っていた空間に暖かな息が吹き込まれ、新たな命が宿ったような感じが感じられた（写真1）。創業支援としてはもちろん、空間活用としても、マチソダテベースが須賀川のまちなかに新しい風を吹かせており、注目を集める場となっている。

このように、みちしるべのビジョン実現に向けて、様々な実践を展開しているところではあるが、その最中でさえ、須賀川市として人口減少や高齢化が進行し、空き家や空き地が増加しており、悩みは尽きない状況である。しかしエリプラの取り組みは決して無益なものではなく、むしろ活力を失せず創出していくための積み重ねであると捉えたい。筆者としても、未来ビジョンに寄せたメッセージとやや重複するが、須賀川のまちづくりが10年先も色褪せず深化していく様子を、今後も追いかけていく一員になりたいと切に願っている。

<参考文献>

- 1) 須賀川南部地区エリアプラットフォーム「みちしるべ」